

---

# 彼岸花の恋歌

桜田 零

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

彼岸花の恋歌

### 【Zコード】

N1362Y

### 【作者名】

桜田 零

### 【あらすじ】

高校の屋上から友人に落とされた少女。

次に気づいた時は異世界だった。

ラノベは好きだし、二つ年上の兄はゲームだったから、なんとなくは受け入れられる。

受け入れられるけど、私って一体誰だっけ？

自分の名前を忘れた少女と偶然丘に立ち寄った青年は自分たちの運命も知らず出会いてしまい…

( 作者のノリで連載したので更新は不定期になると思っています。 )

## プロローグ（前書き）

恋愛書くのが苦手な作者が気まぐれで書いたので、あんまり期待しないで下さい。

## プロローグ

—突然の出来事だった。

学校の友人達と遊んでいて、高校の屋上にいた。

「あつごめん、大切なヘアピン落としちゃった！取ってくれる？」

「いいよ、ちょっと待つて！」

友達が落としたというヘアピンを取ろうと柵を超えた時だった。少女は自分のお人好しが仇になるなど思つてもいなかつただろう。

—憎しみが混じつた笑顔の友人に落とされるまでは。

『え！？ 何で？…どうしてこんなことに…』

何も言えず、地面に吸い込まれて行つた少女は背中に衝撃がはしると同時に意識を手放した。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

少女が次に目覚めた時は、見知らぬ白い花が咲き乱れた海の近くの丘だった。

『ここ、何処なの？』

自分がいた世界とは違つてこなは気づいた。気づいたのは良いのだが、違和感を感じていた。

『——私は、誰?』

## 第一話 大切なモノを忘れました。（前書き）

一話目のクセに短いです。

本編から、大方主人公視点だと思います。

## 第一話 大切なモノを忘れました。

『二二二、何処なの？』

気がついたら知らない場所にいた。白い花が咲き乱れている丘みたいな所。潮の匂いもする事からどうも海の近くみたい。どうして此処に居るのかを整理するためにこれまでの事を思い出してください。

『えっと、昼休みに遥達と屋上に行つて……ああ、そうだ！ 遥が大げにしてたヘアピンを取ろうとして柵を越えたんだった。越えた直後に遙に押されて……。』

だんだんと思い出してくるのと同時に、怒りがこみ上げて来た。

握り拳が固くなる。

だけどすぐ、解いた。今は目の前に遙が居るわけじゃないし、多分あの時に私の人生は終わっていると思う……。

とりあえず、此処は学校じゃないので、どこにいるのか辺りを見回してみた。

最初は天国だと思つていたけれど、あまりにも感じるモノ全てがリアルだからきっと違うような気がする。でも、日本にはこんな綺麗な所があるなんて聞いたことがない。有り得ないかも知れないけど、この状況でこの選択肢が一番合つているとオタク知識が言つて

いる。

### ——異世界トリップ

携帯小説やラノベによくあるあれだ。モブだつた私がまさかつて思つたけど、実際に見ているのは学校でも、ましてや日本でもない知らない風景。これじゃあ、認めざるおえないよね…。

普通の人だつたらきっと、今頃途方に暮れているに違いないと思うけど、ラノベ大好きだつたし、二つ年上の兄がゲーマーだつたら「異世界トリップバチコイ！」なんだよねえ。自分で言うのもなんだけど、こんなに簡単に受け入れても良いのかな？

此処を離れて今いる所がどんな所なのか知りたくて、地面から立つとある違和感に気づいた。

小さい頃からの私の記憶はある。背中まで伸ばした髪だつてちゃんと黒いまだし。私が着ているのは高校の制服のまま。変わつた所なんて一つもない。私は私のまだもん！つてあれ？いつもなら「だもん！」つていつも自分の名前入つてたよね？ そういえば…

『——私は、誰？』

どうやら、元の世界に自分の名前を置いて来たらしいです……。



## 第一話 大切なモノを忘れました。（後書き）

漢字「ス」などの「」指摘が有りましたらお願いします。

あと、検索ワードの「異世界転生」を「異世界トランプ」に訂正させて頂きました。

第一話 赤毛の魔女に丑金こもった。（前書き）

11 / 14 一文呪しました。

## 第一話 赤毛の傭兵に出会いました。

名前を忘れたことにかなりのショックを受けて花が咲いた丘に立ちすくんでた。

秋生まれの私に父がつけてくれた名前。母や兄が愛情を込めて呼んでくれた大好きな自分の名前をいとも簡単に忘れてしまったことに凄くショックを受けた。

『父さん、母さん、兄さん……』めんね……『めんなさい……』

…』

視界が一気に滲んでいった。田尻から私の体温と同じく涼いの水が頬を濡らしていった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

一体どれだけ泣いていたんだろう？落ち着いた時には辺りは薄暗くなつてた。

とりあえず、街の方まで出ようと思つた。こんな所にいても何も始まらないし飢え死にしちゃいそう！

決断からの行動は案外早いもので、道のある方へ歩き出した……かつたのに。

……すっかり異世界だつてこと忘れてた！

私の前に魔物が飛び出して來たんです。

狼みたいだけど……何か少し小さい？でも口から見える牙は見た目によわざ鋭い。

狙いはもちろんです……どう見ても私のようです。〇ーン

一方の私は当然丸腰。そもそも、武器とか持つてたら銃刀法違反で今頃刑務所だよ！私だって平凡な日本人女子校生だからね！オロオロしてると狼君（可愛いし、名前なんて知らないので。）がこちらに向かって飛び出して来た。

トリップ早々殺されるなんて思つてなかつた。もつ駄目と思つてぎゅっと目を瞑つた。

――ザシュツ――

何かが切れる音がして、思わず目を開けてしまった。

飛びかかって来ていた筈の狼君は鮮やかな赤い液体を撒き散らしながら倒れていて、その後ろにその原因と思われる

「大丈夫か？ 怪我は……？」

綺麗な赤毛の青年が立つていた。

青年は、私より頭一つ分くらい背が高い。腰ぐらいまで伸ばしていると思われる赤毛の髪はうなじの所で一つに結つてある。瞳は……エメラルドを思わせるような深い翠。感じはまんま西洋系で……。

「本当に大丈夫か？ もしかして具合悪いのか？」  
「大丈夫です！ ごめんなさい」

つい、彼の容姿に見とれてしまった。ああ、恥ずかしい！  
彼のテノールの優しそうな声に我に返つて慌ててしまつて、やつと返事をした有り様だ。

「何故こんな所に一人で居るんだ? それはさておき、あいつの家は近くだからもうここまで送つてやるよ」

「…………」

彼から少し視線を外した。

申し出は嬉しかったけれど、今の私に帰る場所なんてない。そんなことを言つたら、此処にいる理由を絶対聞かれると思う。それに名前も……。

正直、この人に言つて良いのか不安だった。

「どうしたんだ? 家が分からぬのか?」

彼の声からして少し焦つているみたい。

話さない事には何にも始まらないので、とりあえず馬鹿にされるの前提でぶつちやける事にした。

「帰る家は無いんです」

彼を真つ直ぐに見て言つ。案の定、彼は不思議そうな顔をした。そんなお構いなしとでも言つように私はそのまま話し続ける。

「今から言つ事は事実ですが、信じる信じないは貴方次第です。私はこの世界の人間ではありません。事故に遭遇して、気を失つてる間にこの世界にきました。なので、此処が何処なのかとか、この世界での常識とか、その外色々な事を私は知りません。なので私に帰る所なんて……無いんです」

本当は事故じゃなくて遙に落とされたんだけどね。自分で言つておきながら何だか悲しくなってきた。

恐る恐る彼の表情を見ると、凄く悩んでいたような顔をしてた。  
しばらく考えて彼が口を開く。

「確認するけど、帰る場所がねーんだよな？」

「は、はい…」

「なら、安定した生活ができるようになるまで俺と来ねえか？」

私は田を見開いた。だつて馬鹿にされると思つてたんだもん！

「あーやっぱり、俺みたいな傭兵どこののは嫌か？」

「そんなことあつません！宜しくお願ひします！！」

嬉しくてとびっきりの笑顔で笑うと彼は少し視線をずらしたような気がした。

## 第一話 赤毛の魔女が出来ました。（後書き）

やつとキー キヤ ラクター 出て来ました。

お隣に入り登録してくださった方、本当に感謝 × 2 ですー。（ ）  
「」感想などお持ちしておられますー。

## 第三話 俺は黒髪の少女に恋した。（青年時代）（前書き）

「話を書かせて貰ってお邊にしませう！」

## 第二話 僕は黒髪の少女に出会った。（青年side）

あれは昼過ぎだったと思う。依頼を達成して、依頼があったフェージの街に戻らうとした時だった。

昼間だと言うのに白に近い黄色い流星が流れ落ちていたのを俺は確かに見ていた。いや、厳密には流星じゃなくて何かの魔法の発信源だと思う。

ほっとけば良いものを不信に思った俺は、結局流星の収束地点に向かって走り出していた。

余計な事に首突っ込んで最後の最後で痛い目に合つのは分かりきつている事なのにこの時だけは行かずにはいられなかつた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

そのまま流星を追つていると、とある花畠に向かっていることが分かつた。

あそこは、沢山の種類のリコリスが咲く事で有名な場所だ。確かにこの時期はナツズイセンとう薄桃色のリコリスが咲いていたと思う。

そんなことを考えながら目的地に向かって走り続けた。この調子だと日が沈む前に着くと思う。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

リコリス畠の入口に差し掛かった所だった。

草むらからウルフの幼体が出て来て花畠の方へ向かつて行つたのを見た。そこまでは何とも無いと思っていたが、さつきから俺の第六感が警告を促しているような気がしたから急いでそのウルフの幼体を追いかけた。

案の定、あと少しでウルフの幼体の餌食にされる奴が出るといつだつた。

獲物に飛びかかったウルフの幼体を居合い切りで切り捨てた。血飛沫を上げて倒れ行くウルフの幼体の餌食を見た途端、俺は絶句した。

——そこに立っていたのは、少し幼さが残つた神秘的な少女だったのだから。

背中まで伸びた漆黒の髪に、光加減によつては亞麻色に見える黒い瞳。見たことも無い服からはあまり体型が分からぬが、きっと華奢な体をしているのだと思つ。

おつと、彼女の容姿に見とれて話しかけるのを忘れる所だつた。

## 第二話 俺は黒髪の少女に出会った。（青年版）（後書き）

長かったので切りました。

1作目が不調だったせいか、検索数を見てビックリしましたー皆さん読んで頂いて本当に感謝しきれません（、、）お気に入り登録してくださった方々、本当にありがとうございます（Ｔ^Ｔ）

## 第四話 俺は少女を連れていってしまった（青年篇）（前編）

三話の続きです。

## 第四話 僕は少女を連れて行くことにした（青年 side）

「大丈夫か？ 怪我は……？」

とりあえず何処にも怪我は無いか聞いてみる。が、返事が無い。まさか、彼女の目の前で魔物を切った事に対し気分が悪くなつたとか！？

心配になつてもう一度聞いてみる。

「本当に大丈夫か？ もしかして具合悪いのか？」

「大丈夫です！」めんなさい」

彼女はやつと返事をしてくれた。容姿ぞうりつて言つて良いのか声もまた可愛らしい。

どうやら、彼女に怪我は無いようで少し安心した。が、まだ早いと思つ。何故なら彼女を家まで送り届けねばならないからだ。

「何故こんな所に一人で居るんだ？ それはさておき、きつと家は近くだからそこまで送つてやるよ」

「…………」

彼女は俺から視線を外して悲しそうな顔をした。

数分たつて何かを決意すると俺に向き直つて真面目な視線で話し出した。

「帰る家は無いんですね」

俺は不思議に思つた。服の質からしてそれなりに裕福そなこの少女に帰る家が無いなんて考えられないからだ。

俺が不思議に思つた事は想定内だつたのか、彼女は話し続ける。

「今から言つ事は事実ですが、信じる信じないは貴方次第です。私はこの世界の人間ではありません。事故に遭遇して、気を失つてる間にこの世界にきました。なので、此処が何処なのかとか、この世界での常識とか、その外色々な事を私は知りません。なので私に帰る場所なんて……無いんです」

そう言つてはいる彼女の顔は何処か寂しそうだつた。

『なんとかしてやりたい』

考えられるだけ考えて、ある案を出してはいた。

「確認するけど、帰る場所がねーんだよな？」

「は、はい…」

「なら、安定した生活ができるようになるまで俺と来ねえか？」

彼女は目を見開いた。がそれ以上に俺自身が驚いていた。  
近くの街の修道院にでも連れていけばきっと面倒を見てもらえる  
と思うのに。

この時、俺は彼女に一目惚れした事に気づいていなかつた。

「あーやっぱり、俺みたいな傭兵といるのは嫌か？」

「そんなことありません！宜しくお願ひします！！」

その時見た彼女の笑顔が眩しくて目を背けたのと同時に、心臓が跳ねた理由を俺はこの時知る術が無かつた。



## 第四話 俺は少女を連れて行へりてした（青年時代）（後編）（お書き

二話に書きましたが、「感想などお持ちします。

## 第五話 新しい名前をもりこました。（前書き）

区切りがつかと思ったのですが、切れ目が無くてつなので結構長くな  
りました……。rz

## 第五話 新しい名前をもらいました。

彼は何かを思い出したように私に向き直って話をきりだした。

「そういえば、まだ名乗つて無かつたな。俺はラグ。今此処にいるアグシリア大陸の王国レストの傭兵だ。で、お前は？」

やつぱり聞かれました！私、自分の名前が思い出せそうにないです。本当に困りました。○rn

私が困っているのを見て、彼…ラグさんはまた心配そうな顔をした。

「どうしたんだ？本名名乗るのが嫌なら偽名名乗つたって良いんだぜ？」

「えつと……」

本当に困った。「名前、忘れちゃいました てへつ」なんて言った矢先には、変な奴には近づくなつて絶対見捨てられる……。うわああああ！嫌つ！パス！それだけは勘弁！こんな所で飢え死にだけは御免よ！！

「クスッ…アハハハハハハ…！」

自分のオーバーな考えに浸つていたらいきなりラグさんに笑われてしまった。それもかなり豪快に……。

「な、何笑ってるんですかラグさん！？」

怒った私は兄と喧嘩するときのように自分の顔をラグさんの顔に

近づけた。

ラグさんは驚いたのと同時に顔を少し赤くして田を私から反らした。

『あ、あれ？ 勝つちやつた？』

兄と違つ反応を示して少しあやうぎた事を反省する。視線を反らしたままでラグさんが言った。

「あー、その……、笑つて悪かつたな。お前の両面相がスゲー面白くて……」「こちらこそ、怒り方キツくてみませんでした。…………私の顔が原因か。何か凹むなあ」

最後の独り言は聞こえなかつたらじしく少し安心した。

「で、お前の名前は？」

どわあああ……ラグさん、話しへ戻さないで……

これ以上は変な顔を見られたくないのと結局白状する事にした。

「此處に来た衝撃か何かで名前忘れたんですけど……」

ラグさんは田を見開いていた。やっぱり変人扱いされるう……！

「そつか……。家や知り合いだけじゃなくて名前まで……」「ほえ？」

何だか知らないけど、同情を買つてしましました。…………うん、これを期にすぐネガティブになるの止めよう。

そんな事を考えていたらラグさんが口を開いた。

「…………リコリス」

「えつ？」

「リコリス、お前の名前だよ。名前忘れたんだろ？だつたら俺が付けたつて構わないよな？名前無いと困る事も多いと思つし……駄目か？」

ラグさんは少し不安が混じつた笑顔を向けてくるけど、私は凄く嬉しかった。

私の名前を考えてくれたし、リコリスは秋生まれの私にぴったりだつたから。

リコリス…ヒガンバナ科ヒガンバナ属の総称のことでもちろん彼岸花もこの中に入る。そういうば、此処の花はなんとなく夏水仙に似てるような気がする。

私は笑つて答える。

「いいえ！嫌じゃ無いです！むしろ凄く気に入りました」

「そうか、良かつた」

そう言つてラグさんも笑つてくれた。今頃だけ、イケメン美男の笑顔つて凶器だよ！絶対！！

「それじゃあ改めて、宜しくなー！リコリス。それと、これから長い付き合いになると思うから、さん付けも敬語も無しで」

「うん！…宜しくね、ラグ！」

その後、私はラグに連れられて、近くの街に向かった。

## 第六話 街に着きました。

目的地のファージという街に着いたのは真夜中だった。

真夜中つて聞くと同年代の某アイドルグループのあの曲とか、某忍者少年のアニメのエンディングとかを思い出す。J-POPが好きだった私は、つい数時間前のことなのに思い出しただけで郷愁にかられていた。

そんな顔をしていたのか、ラグが心配そうに私の顔を覗き込んだ。

「だ、大丈夫、大丈夫！ ちょっと馴れない所来て今後一人になつた時大丈夫か心配になつただけだから！」

「本当か？ それともうそんな先のこと考えてんのか？ 当分はそんなことねえからもつと気楽にいけよ」

何だか見透かされてる気もするけど、それ以上に呆れられてるような気がする。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

宿の受け付けを済ませたラグが私の所へ戻つて来た。二つ持つている鍵のうちの一つを私に渡して、部屋まで連れて行つてくれた。ラグは隣の部屋にいるらしい。

今日は色々あつたから凄く疲れてたみたい。せめてブレザーグラい脱げば良いものをベッドにダイブした瞬間に寝てしまつた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

次の日、朝日と共にラグに起された。元いた世界では、家から高校が近かつたから冬でも起きた時には既に朝だつたんだよね……お陰で凄く眠い……。

最初に連れて来られたのが婦人服屋だつた。お金についてある程度の知識を教えてもらい、お金をもつてラグには外で待つてもらった。

「いらっしゃいませーー！」

うん、どの世界でも挨拶と営業スマイルは大切みたい。  
そんなことを考えながら手つ取り早く服を選んだ。

ラグと一緒に旅をするんだからと動きやすさを重視してズボンにする。女の傭兵もいるから女性用のズボンもあるんだってーー！  
上下三着ずつプラス寝間着を買ってそのうちの一着をその場で着て外へ出た。

今私は、白のブラウスに茶色のボタン付きベスト、赤の細いリボンタイにズボンもブーツカットの茶色の長ズボン。

「ごめんラグ、待たせちゃつた？」

急いで私はラグの元へ駆け寄る。ラグは、そんな私のことを微笑ましそうに見ていた。

「いや、そんな…って言いたいとこだけど、ちょっと長いよつた気がしたから待つてる間に俺の用事も済ませて来ちまつた」

「えー？ 結構待つたつて事だよね？ ごめん…」

「大丈夫だつて、そんな落ち込むなよークスツ…リコリストつてそ

「いつ所が可愛いよな

やう言つて私の頭を撫でるラグ。昔よく兄がやつてくれていたそれは何だか心地良かつた。

「うん、十一歳くらいの妹がいるつていうのも何か良いかもな」「へー?」

ラグの発言に驚いた。今、十一つて言つたよね?あれ?まさかとは思うけど……。

「ねえラグ、私つて何歳に見える?」

「え、十一だろ?」

うふ、やつぱりそうだ。間違われてる。あ、でもせば心面白がりー。

「私、十七だよ」

「えつ……」

はい、凄くあつけらかんとした顔をしました。

……………」いや、誤解を解くのが大変そつです。

## 第七話 街で買ひ物中です。（前書き）

一話一話が段々長くなつてゐるよつたな……

## 第七話 街で買い物中です。

あれから、なんとか誤解は解けた訳なんだけど……。

「リコリスが三歳年下だなんて……。まあ、妹分ができた事には変わりねえか」

なんて言つてラグは一人で何か納得してた。とりあえず私は妹分決定らしい。一つ上だろうが三つ上だろうが兄がいた私にしてみればあんまり変わらないような気がするのは気のせいかな？

そんなことを考えてため息をつくとラグが私の手をいきなり掴んだかと思つとそのまま私を引っ張つて走り出した。

「リコリス、次は武器屋に行こうぜ！俺について来るんだ、何か護身用に持つてた方が安心だろ？」

「分かつた、分かつたけど走る必要無いじゃない！」

楽しそうな嬉しそうな顔をしたラグはどこか子供っぽく見える。これじゃあ、私がお姉ちゃんみたいじゃないかって突っ込んでやりたかったけど、ラグの様子からして聞いてくれそうになかったから、心の内にそつと秘めておいた。

走つていて思うんだけど、私末だにローファーだよーまずそつちをどうにかして欲しいよ。

またため息をついて言おうと思つて立ち止まひつとしたけど、ラグの力の方が強くてそのまま引っ張られてしまった。

この調子だと武器を買ってからになっちゃいそう。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

うん、居心地悪い。日本人には全く縁のない場所だから、正直早くこんな所出たかった。

そんな私にはお構いなしにラグはあれはこれはと武器を持って来る。

「リコリスト、レイピアなら軽いからお前がも扱えるだろ?」

「「めん、私フェンシングなんてやつた事無いから…」

「じゃあ、スローナイフ…」

「ダーツで真ん中になんてぐるぐる当てた事無いし…」

かれこれ一時間ずっとこんな感じだった。一応、中学は剣道部だったけれどあれの基本は刀だし、この世界にはないと思つ。で、結局私が選んだのはサーベル。そんなに重くないし、基本的な所は長剣とさほど変わらないみたい。片手で扱うつていうのが問題だけど、馴れればなんとかなると思つ。

「本当にそれで良いのか?他に扱いやすいのあ「これで良いの…」

ラグが言い終わる前に言つてやりました。このぐらいの我が儘なら大丈夫だよね?何だか店に入った途端、ラグが心配性になつたような気がする。

納得のいかない顔をしながらもラグは会計を済ませて買ったサーベルを私に渡してくれた。

受け取つた後、来るときに思つた事をねだつてみる。

「ラグ、靴と下着欲しいんだけど…………」

そういうとラグはしまったというような顔をした。ああ、やっぱ  
りそちらへんの大事な事忘れてたんだ…。

その後、ラグに連れられて下着と靴（もちろん、ラグには外で待  
つてもらつた）を買つた。

そういうえば、宿代含めてラグにお金出して貰つてばっかりだつた  
けれど、ちゃんと返さないとまずいよね。

「ねえラグ、お金出して貰つてばっかりだナビ返すの遅くなつても  
いい？私お金持つてないから」

不安にラグを見上げる私にちょっと赤面して視線をずらしたラグ  
はそんな私の頭を撫でた。

「さ、気にすんなつつただろ。俺自身そんな使わねーから困る事  
ねえし、お前がこっちで生活できるまで俺は面倒見るつもりだから」

ラグはそこまで考えてくれてたんだ。それが嬉しかった半面申し  
訳なかつた。

「ラグ、ありがとう」

「いいくてことよ。さあ、帰ろうぜ」

笑つて頷くと、ラグは私の手を取つて宿へと歩き出した。

第八話 俺の妹分…だよな？（ラグ side）（前書き）

二回目のラグ君サイドです！

## 第八話 僕の妹分…だよな？（ラグ side）

リコリスを保護してからずつとこんな調子だつた。アイツの表情一つで焦つたり、嬉しくなつたり……まるで俺が俺でなくなつたみたいだつた。

リコリスの生活品を買い揃えて宿に戻る途中、一瞬だけリコリスを見る。十七だと言われたがやはり実年齢よりも幼く見える。リコリスが言うには、彼女の身長は平均はあるらしいから、彼女の世界の人間の身長が伺えてしまう。

「ラグ、宿見えてきたよ！」

そう言つて繋いでいた手を離して宿の方へと走つて行く。見た目もそつだがその行動もどこか幼く見える原因かもしねりないな。

「ラグー！早く早く」

「ああ、今行くから待つてろ！」

無邪気に笑う彼女が可愛いくて仕方がなかつた。俺自身妹も弟もいたけれど、いつつもいがみ合つっていたような気がする。

『きっと俺はこんな妹が欲しかつたのかもしれない』

そう思い込んで上手く丸め込んだものの、やはりと言つべきか腑に落ちない所があつた。

何故、リコリスの笑顔を見る度に心臓が跳ねるのか。何故、リコリスの行動で俺の顔が熱くなるのか。何故、

…………リコリスと離れたくないのか。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

夜、明日の予定を伝えるべくリコリスの部屋を訪れたのだが…。

コンコンッ

「リコリス、ラグだ。開けてくれ

リコリスからの返事が全く無かつたから、心配で合い鍵をわざわざ借りて来て部屋に入る。

結果的には俺の取り越し苦労だった。リコリスは風呂からあがつて部屋へ戻つて来た後、そのまま寝てしまつたらしい。

ドアストッパーでドアを開けた状態で止めてリコリスの所まで寄る。

気持ち良さそうに寝息を立てて寝ているのをそつと眺める。不意に俺の顔が綻んでいるのに気づき、驚いた、がすぐにいつもどおりに戻す。

彼女の顔にかかつた髪をそつとほりつて彼女の頭を撫でる。

「お休み、リコリス」

そつと彼女に告げて部屋を出た。

明日はリコリスを連れて王都のギルドに仕事を探しに行こうと思

う。きっとリコリスは此處よりも大きな街を見たらきっとはしゃぐと思う。想像するだけでも心が弾んだ。

でも、上手く逃げ切れるのか？王都はあの人いる所だ。見つかつたら俺だけじゃなくてリコリスも何をされるか分からぬ。

いつの間にか、俺自身の事ではなくリコリスの安否を心配していた。

『…当たり前か。だつてリコリスは俺の妹分だから』

たつた一日しか一緒に過ごしていないのにリコリスを大切に思つてる自分がいた。

## 第九話 王都に向けて出発しました。

朝起きていきなりの事だったから、急いで荷物を纏めていた。

「何よ何よ何よ…何でいきなり『あ、今日王都に行くから』って言うのよ…昨日のうちに言えつづーの…」

文句タラタラ言いながらも荷物を纏める手の動きが鈍くならないのはサボリ癖の酷い兄がいたからだと思ひ。

本当、兄さん大丈夫かなあ？ 家事全般はできないし、部屋に籠もつて大人しいと思つたらゲームしてるし、気づいたら私のおやつ食べてるし…！

あー、やっぱあの駄目兄貴の事考えてたらムカついてきた。

今日は朝から腹がたちっぱなしなのに。

「リコリス、支度終わつたか？」

はい、来ましたよ。私が朝からムカつかなきやいけない原因を作つた張・本・人が！

「終わりましたけど、何か？」

「もしかして、おこつて「当たり前です…！」

ラグが言い終わる前に言つてやつた。そのまま立て続けに文句も言つてやる。

「だいたいねえ、今朝いきなり言つのがいけないのよ…！ 昨日のうちに言いに来るとか「言いに来たけど、リコリス寝てたし」五月蠅

「い！だつたら起きてるときに言つてよ！私の準備が遅くなつて出るのが遅くなるでしょ！？そなつたらできるモノもできなくなるでしょー！」

途中口をはさまれたがマシンガンの「とく言つてやる。だつて、このぐらい言わないと絶対次もこんな感じで出るの遅くなるもん。

「いい？分かつた？」

「ハイ……」

返事をしたのは良いものの、部屋の隅っこで膝抱えてラグが落ち込んじやつたから更に出发の時間が遅くなつたのは言つまでもないと思ひ。

=====

「あ、そういうえば魔法について教えて無かつたな  
「えー？この世界には魔法があるの？」

道中、ラグが思い出したように言つたセリフに思わず目が光つた。  
だつて魔法だよ！魔法が有るんだよー！ゲームや中一病なオタク  
なら一度は使ってみたいアレですよ！

「リコリストのいた世界には無かつたのか？」

「魔法つていう考えじたいはあつたけど、無かつたよ

やつ言つてラグは興味深そうな顔をした。

「分かつた。それじゃあ、基本的な所からな。まず、魔法を使役するには自身の魔力を消費するんだが、それは個人で差がある。それでもって、魔力を多く消費することによって強力な魔法を使役することができるんだ。但し、魔法を使役し過ぎて魔力が無くなってしまうと、最悪命を落とすから気をつけてくれよ。…………と、こんな感じかな？」

ラグの説明で魔法と魔力については分かつた。魔法を使い過ぎるつて怖いね。

「分かつた。ねえラグ、属性とかは無いの？」

「まあ、待てよ。それを今から説明するんだろ。…………属性についてだが、炎、水、地、風、雷、光、闇、無の八属性が有るんだ。そのうちの五つは炎 水 雷 地 風 炎のような感じで強弱関係がループ状になつていて、光と闇はお互いを打ち消しあう関係。無属性は有利不利は無くて、相手の属性に関係なく一定の効果を使えるんだ。でも発動時間も規模も他の属性に比べて小さいっていう『メリット』が有るのを忘れないで欲しい」

「うん、分かつた！」

「最後に使用方法だけど、基本はイメージ。詠唱はイメージしやすくするためにだから、できるなら要らないんだ」

ラグに魔法について一通り教えてもらつた後、ちょっと試してみたら規模が小さいのは、一通りできた。

今度は実践でつて思つていたら丁度良く魔物が出てきた。

「リリス、実践してみるか？」

「うん！」

私が頷くと、ラグは長剣を私はサーベルを抜いた。



第十話 トリッパーに魔法はお馴染みのようですが。（前書き）

後半はシリアル＆残酷描写があります。

## 第十話 トリッパーに魔法はお馴染みのよつです。

ラグが魔物に向かつて行く…と思つたら、ダラリと長剣を下げる。アレ? 攻撃するんじやないの!?

「リコリス、お前一人でやつてみりよ。ビウセ、ルヴ・ースライムだし。実践には持つてこいだろ?」

や、ラグくーん、それはないと思つよー。

「で言つなら私もーだよ! いきなり一人でやれとか無理だからー。兎に角やつてみりよー無理そつだつたら俺がやるから!」

そいやつて背中を押されて一步前へ出る。

ラグの様子を見ると私が攻撃するまで何もしてくれないらしい。何だよ! どこの鬼教官だよ! 私は警められて伸びるタイプであつていきなり無茶苦茶しても身に付かないのに。

何もしないといくらスライムでもやられてしまつので仕方無くやる事にした。

えつと、イメージイメージ。雷の球を放つ感じで……。

「サンダーシュート……」

イメージ通りの雷の球が正面に出現、発射してスライムに当たる。魔法に当たったスライムはそのまま気絶してしまつていた。

「初めてにしては上出来だと思つぜ。後は魔力のコントロールだけだと思つ」

そう言われて頭を撫でられる。剣ダコのできているその手に頭を撫でられるのはとても心地良かつた。兄にされる時は違つ感じがしていたけれど、気にしない事にしていた。

「さて、そろそろ行くか。出るのが遅くなるとできるモノもできなくなるんだろう?」

「それ私のセリフ!-!」

私とラグはじゃれあい(?)ながら王都へと向かつた。

=====

「リコリスト、下がれ!」

ラグは私を背後に隠すと自分は長剣を抜いた。

王都へ向かう途中にある森で私達の前に飛び出して来たのはゴブリンで、人型に近い姿をしているブサイクでチビな魔物だつた。

ラグは相手の攻撃をステップで華麗に避けでは相手の隙を狙つて一閃する。

ゴブリンはその辺の魔物と違つてある程度(と言つてもサル程度)の知能が有るから攻撃がクリーンヒットし難いみたい。

それにラグ一人対ゴブリン三体は流石にキツいのではないかと心配でしようがなかつた。

『私にできる事はないかな?』

そう思つた瞬間、私は行動をとつていた。一瞬、昔からそうして

いたかのような錯覚に捕らわれそうになつた。

「闇よ、彼の者を縛れ『バインド』……」

私が唱えた後、ゴブリンの足下に黒い魔法陣が浮かんでそこから出てきた黒い触手状の物がゴブリン達を絡めて縛る。

ラグは驚いて私の方を見ていたけれど、折角のチャンスを逃すまいとゴブリン達を田掛けて駆ける。

ゴブリン達の間を縫つて行きながら横風に長剣を振つていく。ラグが通り過ぎた傍から鮮血が飛ぶ。次々とゴブリン達の奇怪な断末魔が上がる。

近くで見ていて吐き気がした。私にとっての非日常が今、田の前で起こつていて、これからこの光景が日常になるんだと思つと少し悲しくなつた。

私が向こうの世界で生きていることになつてゐるのがどうかも分からぬし、その前にこの世界から帰れるかも分からぬ。だとしたら、私は……。

向こうにいたときの自分にサヨナラをするつもりも含めて、一つの魔法を詠唱する。

「燃え盛る槍よ、彼の者を貫き焼きへくせ『フレイムランス』……」

空中に出現した赤い魔法陣から槍の形をした炎がラグに切られて倒れているゴブリンに向かつて降り注いだ。さつきのような断末魔は聞こえ無かつたけど、肉の焼ける気持ち悪い匂いが鼻を刺激した。さつきまで戦つていた敵と共に昔の私が燃えているような気がした。

長剣についた血を振り払つて鞘に収めたラグがこちらに向かつて歩いてくる。ラグは凄く難しい顔をしていた。多分、『フレイムランス』を使った意味を理解したのかもしない。あるいは、私が凄

く打かない顔をしていたのかもしれない。

「……行けるか？」

ラグはただ一言言つただけだった。

「うん……」

どこか暗い返事をしたときだった。

ガバッ！！

ラグが私の腕を掴んだかと思つたら、気づいた時には視界が真っ暗だつた。少し経つてラグに抱きしめられているのを理解する。

「泣きたい時は我慢しねえで泣けよ。全部、俺が受け止めてやるから

その言葉が嬉しかつたのか、私の目から涙が一筋零れる。それが引き金になつて涙はどつと溢れてきた。

ラグは私が泣き止むまでずっと抱きしめていてくれた。

第十一話　この世界に来て初めて歌を歌いました。（前書き）

やつと、「恋歌」に繋がる部分出してもおしたー。  
( )

## 第十一話 この世界に来て初めて歌を歌いました。

森の開けた所で今日は野宿することになった。なんだかんだ言つて、結局は私のせいで今日中に王都に着けなかつた。私が泣き止むまでラグはつき合つてくれたんだもん。凄く感謝してる。

今日の夕食は携帯食の干し肉とパンだつた。固くて美味しいとは言えなけれど、背に腹は代えられない。

「悪いな。こんな物しか無くて。リコリスの分だけ何か美味しい物買つとけば良かつたな」

「そんなことないよ！私の分まで用意してもらつて何か申し訳ないつて思つ」

そう言つて笑うと、「そつか」つて言つてラグも笑つてくれた。食事も終わつて二人で寄り添つて夜空を見ていたら、頭の中で詩が出来上がつていた。

高校では軽音部に入つていたから、オリジナルの歌をよく友達と作つてたなあ。私が詩を書いて、他の子達が曲を付けて……。

そんな事を思い出しながらラグに買つて貰つたノートとペンを取り出して浮かんだ詩をサラサラと書いていく。隣でラグが不思議そうにこつちを見ている。

「リ」「リス、何書いてんだ？」

「ん？ ヒリシーパー！」

私がちょっと意地悪したら、ラグはそのまま拗ねてしまつた。失礼かもしれないけれど、ラグつて拗ねると可愛い！！

ちょっと笑いを零してまた詩を書き始める。もちろん、日本語だからラグは読めない。だから、さつきから「何書いてんだ？」「ヒ

ミツー！」のやり取りばかりしてた。

三十分ぐらいで詩は出来あがつた。もちろん、メロディーはもう

考へてある。

私はこの森の美味しい空気をいっぱい吸つて今までいたばかりの歌を歌い始める。

幼い僕が喧嘩したあの日  
頭を撫でたその手の平が  
「ごめんね」と伝えてきた

帰りたいと思つていても  
帰れないと分かつていてから  
「今」を生きてこう、  
自分らしく  
どんな辛い事があつたとしても  
「今」を生きてこう、  
後悔しないように

だつて今は「お帰り」つて  
言つてくれる人がいるから

歌い終わつて、ラグの方を見る。

ラグはそつと瞳を閉じて心地良さそうに聞いていたみたい。目を  
瞑つている横顔もなんだか綺麗だつた。イケメン美男は何をしても格好いい  
んだと思うとなんだか平凡顔の自分が悲しくなつてきた。

瞼が持ち上げられ、露わになつた翠の瞳が私を捉える。

捉えられた瞬間、ドクドクという音が聞こえてきた。ラグから顔  
を逸らせられないのは何で？

私が体験したこと無い事に混乱してい時、先に沈黙を破ったのはラグだった。

「もしかして、さつき書いていたのはそれか?」「う、うん」

ラグの質問を答えてやつと、視線を逸らす事ができた。それと同時に高鳴っていた鼓動もだんだんと収まる。隣から楽しそうな声が聞こえてきた。

「お前の歌声って心地いいな。また今度、聞かせてくれないか?」

驚いてラグの方を見たけれど、最後の一言が凄く嬉しくて蔓延の笑みで頷いた。

「うん、もちろんだよー。」

微笑ましそうに私を見てたラグは、私の肩をだいてさき寄せると反対の手で私の頭を撫でた。

「ああ、約束だぞ。今田はもう遅いから寝ろよ」

「分かった。お休み、ラグ」

「ああ、お休み。リコリスト」

そういうやり取りをした後、ラグの肩に頭を乗せて田を閉じた。明日の王都、楽しみだな。

## 第十一話 隣のアイツは騎士でした。

私達が王都ファーランドにいたのは嘘だつた。

王都はとても綺麗で華やかかつ賑やかだった。街は赤茶色の髪の青年が主人公の某RPGの王都みたいで、中世ヨーロッパ風のお城に色とりどりのレンガの家、広場は綺麗に整えられていて街全体が一つの芸術品みたいだった。

「すつごーい！綺麗……」

た  
緑鹿たる

街に見とれていた私をラグは微笑ましい物見るよう見ていた。そんなラグの顔を見てちょっと私の眉間にしわが寄る。ついでのよう羞恥で顔が熱くなつたのは言うまでもない。

「何こつち見てるの？恥ずかしいから見ないでよー。」「悪い悪い。つい…な」

そう言つて、ラグは笑つたけどちょっと照れてるみたい。この数日で分かつたけど、ラグつて照れると自分の頭をかく癖がある。今だつて、頭をかいてるもん。

「ラグ、行こう！」

ラグに手を差し出す。ラグはちょっと躊躇つたけれど、そつと微笑んで

「ああ、行こうか」

私の手をとつた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

私は只今、一人で街を散策中です。

本当はラグについて行きたかったけど、大事な用事だから駄目つて言われちゃつた。その代わり、明日傭兵ギルドに連れて行つてくれるつて！これで仕事ができたら万々歳だよね！人に頼つてばかりの駄目人間にならなくて済むんだよね！

やつと仕事ができると思うと凄くテンションが上がつた。明日が楽しみ！

上機嫌にスキップしながら色々なお店を見て回つた。

菓子屋や装飾品屋に本屋とか…。兎に角色々見て回つた。欲しい物は沢山あつたけど、いつもの癖で色々な所を見てから一番安い物を買つてしまつ。

まあ、高校生つてお金使つて友達と遊びに行きたい時期だから、いつつも金欠なのよね。こういう事するのも高校生ライフが関係してるんじゃないかな？

それよりも、別際のラグが可笑しかつた。「無駄遣いするなよ！」とか、「知らない人にはついて行くな！」とか、「変な奴に捕まりそうになつたら兎に角逃げろ」とか、何か凄く過保護だつた。正直、どうにかしてつてくらいに。

売り物を見てファージよりも物価が高いなと思つてたら、聞き覚えのある声がした。

「高梨！」

聞き覚えはあつた気がしたけど、私の事を呼んでなかつたみたい

なのでもちりん無視。

「高梨……」

どんどん声がこっちに近づいて来ているような気がするけど、リコリストこう私の名前を呼ばれてないのでやっぱり無視。

「高梨、無視すんじゃねーよ！」

「高梨つて誰…つて、え…？」

声の主は私の肩を強引に引っ張った。

私は高梨なんて名前じゃないから人違いだつて訴えてやろうと思つたけど、相手の顔を見たらそれも言えなくなつた。だつて、目の前にいるのは…

「ルキア…？」

「それ以外誰がいるんだよ」

目の前にいる黒髪の青年は、高校で私の隣の席にいた天城ルキア（アマギルキア）だつたのだから。

「それよりも、何でシカトしたんだよ？」

「え…？私の事呼んでたの？」

あくまでも私は名前を覚えていないから、自分の事を呼ばれても私の事だと分からない。

ルキアは名探偵みたいに左手を顎にあてて考え込んだ。

その後、私の腕を掴むとそのままスタスタと何処かへ行こうとする。

「えー? ビーに行くの?」

ルキアは何も言わずに私を引っ張つて行った。

====

「へえ、じゃあ今はリコリストで名乗つてているのか  
「うん、そう。自分が呼ばれてたなんて思つてなかつたの。ごめん  
ね」

ルキアに連れて来られたのは喫茶店だつた。場所を移したかつたら  
らしい。ちゃんと言つてくれればいいのに。

ルキアは一年前に私みたいに遙に突き落とされてここに来たんだ  
つて。で、遙からの課題（後日発表）をクリアすれば自由にこっち  
とあつちの世界を行き来できるらしい。ちなみにルキアはこの国の  
騎士団長なんだつて! … 深い。

さつきルキアが言つてた高梨はお察しの通り私の名字です。  
久しぶりのクラスメイトとの世間話で盛り上がり上がつていたら、過保  
護なあの方の声がしました。

「リコリスト、こんな所でな?」  
「ラグ? どうしたの?」

ラグは私の後ろを見て、固まつた。

「こんな所に何の用だ? 『紅蓮』のラグ  
「それはこっちの台詞だ。俺んとこのリコリスト連れて何してんだ?  
『氷刃』ルキア」

えつと、ラグとルキアは知り合いなの？それとなんだか一人が怖い。

このままだと、私に死亡フラグが立ちそうなので店からそつと退散させていただきました。

## 第十一話 隣のアイツは騎士でした。（後書き）

新キャラクター登場です！

タイトルの『隣のアイツ』は隣の席のアイツって意味でした。ルキアの他にもあと三人はリコリス達の世界からのトリッパーを登場させようかと考えています。

『紅蓮』VS『氷刃』えっと、一つ答へて何ですか？（前書き）

読み辛かつたら「みんなさこ」（――）

『紅蓮』VS『氷刃』えつと、一つ名づて何ですか？

喫茶店から出て離れると、喫茶店から一人が飛び出して來た。通りまで出でくるとラグは長剣をルキアは刀を抜いた。：って刀あるの！？

嫌な予感がしたから、とりあえず周りに被害が出ないよう結界を張る事にする。

「空間を切断せよ『ゲージ』！」

ドーム状の幕が私達三人の回りを覆つ。結界張るのって辛い。これだけで結構疲れた。

対峙してゐる一人はそれぞれの武器に魔力を込めた。

『凍つけ！！』

『燃えろ！！』

詠唱すると二人の武器に変化が表れる。ルキアの刀は白銀の氷を纏い、ラグの長剣は紅い炎を纏つていた。

何の合図も無く一人が動き出す。

一突いて

捌いて一

下段からの切りかかりー

一跳躍して空中へ

一回転して

一上段からの切り落とし

受け止めてー

ーお互いの魔力がぶつかり合い

二人の間で火花が飛び散る—

弾き飛ばして—

一足で間合いを詰める—

私は一人の闘いに見とれていた。隙の無い攻撃にしなやかな動作…。まるで一頭の聖獣が舞い踊っているようで、一瞬一瞬に目が離せない。

何時もは過保護なアイツと隣の席だったアイツがこんなにレベルが高いだなんて思つてなくて、今の二人と私は違う次元にいるような錯覚すら覚えそうだった。

つて、あれ？待てよ、確かにコイツ等つて決闘じゃなくて喧嘩してんだよね？と言つことは……止めないといけないんじやん…！

そのことに気づいて慌てて詠唱する。

「闇よ、彼の者を縛れ『バインド』…！」

ラグ達の足下に黒い魔法陣が出現してそこから出てきた黒い触手が彼等の手足に絡まる。もちろん、二人は身動きがとれなくなる。

「おい！高梨、何すんだよ！」

「リコリスト、何で俺まで！？」

いきなり縛られて状況を把握できていない一人に、溜め息を吐きながら説明する。

「喧嘩だけで剣を抜くなんて本当に一人共馬鹿！？オマケに魔力まで使つて…。私が結界張つて空間を切り離さなかつたら、街に被害が出てたかも知れないのよ！特にルキアは騎士団長なんだからその辺気をつけなさいよ」

お説教をされて二人共うなだれてい。反省はしていのよつだつたから『バインド』を解いてあげて二人を見た。

「いい? もう馬鹿な真似はしないでね」

今度は優しく言つ。一人も弟がいるみたいでちよつと面白かった。

「「はい……」」

一人揃つて返事する。うん、揃つてるとなんだか気持ちいい! 結界を解いてさつきまでとは別の喫茶店に入る。だつて、さつきの喧嘩の後で同じ店に入れる訳ないじゃん。

店に入つて席についてすぐ、疑問を一人にぶつけてみた。

「ねえ、ラグの『紅蓮』とか、ルキアの『氷刃』って何?」

私の疑問に答えてくれたのはラグだつた。

「二つ名つて言つて、歴戦の戦士達に与えられたあだ名みたいなものかな? 一つ名はその人の特徴に合わせられる。俺なら髪の色と得意な魔法から、その阿呆騎士は戦闘スタイルから付けられんだ。ちなみに、傭兵や騎士にとって二つ名を持つ事は一種のステータスだから、持てるようにみんな努力してんだ」

私は納得した。二コニコしているラグに対してルキアは額に青筋がたつてているような気がするけどあえてそこはスルーした。怒りを露わにしないのは成長した証しか?

「それにしても、高梨の魔法は凄いな。流石、賢帝シオンの妹だな。兄貴も兄貴なら、妹も妹だな」

ルキアの問題発言、いや、通りにして爆弾発言で私もラグも固まつた。  
どうやら兄、  
タカナシシオン  
高梨紫苑も遙によつて一歩飛び飛ばされていったよう  
です。

## 第十四話俺自身の変化(ラグ side)

ファーランドに来てリコリスと別れた後、俺は情報屋に来ていた。  
調べたい事はもちろん

調べたい事はもちろん

「城の状況を聞きたい」

「はいよ。  
んで、どのくらい聞きたいんだ？」

予めポケットの中に入れておいた金貨を出す。その数は三枚。ギルドランクAの俺は、このくらいなら平気で出せる。それにあまり使わないから貯金額もかなりのものだ。

A、SでAランクは俺を含め三人、Sランクは歴代で一人だ。“歴代で”というのは、Sランクだった“シオン・タカナシ”は隣の帝国リーゼアの皇帝で現在Sランクは空席の状態だからだ。

「今回も結構な金額だな。交渉成立と同時に、それじゃあ、何から話そつ？」

あれから数時間経つて、現在俺は街の中心部に来ていた。もちろん、リコリスト合流するためだ。

さつきの情報屋の話によると、国王は現在も第一王子ラグナスを探しているらしい。まあ、レスト王国の民の生活が良くなるか、反乱を起こせる程の力がつくまでは帰るつもりは無いと思うけどな。情報を整理しながら先へ進む。俺はリコリスに早く会いたくて仕

方がなかつた。

やつぱりここ最近、俺は何か変だ。気がついたら何時も彼女の事を考えている。今は何してんのか、何処にいるのか、俺の事はどう思つてているのか…。彼女の事が知りたくなる。

『他人に対する興味が焼けてなくなつていたと思つていたんだけどな』

新しい自分の一面に思わず溜め息が出てしまつていた。

街を一人でぶらついていると、一つの喫茶店に目がついた。シンプルで静かな雰囲気のごく普通の喫茶店だが、窓側の席にリコリスがいた。

「リコリス、こんな所でな」  
「ラグ? どうしたの?」

入つてすぐ、リコリスの向かいにいる奴に驚いた。リコリスがいたのはいいけど何でテメーまでいんだよ! 俺が探していた人物と一緒にいたのは、レスト王国騎士団団長ルキア・アマギだつたからだ。しかも、リコリスと凄く楽しそうに話していやがつた。

リコリスが何時も俺に見せてくれない表情を他の奴が見ているのが凄く悔しくて、腹が立つていて、心臓が締め付けられたようにな苦しかつた。

俺の目線を追つて後ろを向いたリコリスが固まつた。

「こんな所に何の用だ? 『紅蓮』のラグ  
「それはこつちの台詞だ。俺んとこのリコリス連れて何してんだ?  
『氷刃』ルキア」

ルキアが現れた二年前から中が悪かつたためか、喧嘩ごときで剣

を抜いてしまつのはいつまでもないこと態だ。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

結局、リコリスの魔法によつて俺達の喧嘩は止められてしまった。リコリスのお説教を食らい、反省した後別の店で話していた時、あの阿呆騎士は爆弾発言を投下してくれた。

「それにしても、高梨の魔法は凄いな。流石、賢帝シオンの妹だな。兄貴も兄貴なら、妹も妹だな」

「嘘だろー!? リコリスがあの賢帝シオン・タカナシの妹だなんて！ 確かにいとも簡単に上級魔法を発動させるから、きっと特別なヤツだと思っていたけど、まさか元ランク傭兵現皇帝の妹だとは思ひもしなかった。

溜め息をついたリコリスが最初に口を開いた。何か苦虫を噛んだような表情しているけど、大丈夫か？

「ねえルキア、あの駄目兄貴が一体何処にいるか教えてくれる？」

リコリスの発言から、賢帝と呼ばれているシオンが実家ではかなりの駄目っぷりを發揮していたことがわかる。何か意外だった。

「隣の帝国リーゼアにいる。良かつたら、妹姫扱いで騎士団が安全に連れて行つてやることできるけど、どうあるんだ？」

阿呆騎士の誘いに動搖しているリコリスが、俺の方を見てきた。

「どうした？」って聞くと彼女は

「私はルキアのお言葉に甘えよつと黙つたび、ラグはどうする?」  
つて言つてきた。俺の心配をしていたらしい。凄く嬉しかつた。だから答えは…

「 もひろん、一緒に行くぜ!」

俺の答えに嬉しかつたのか、リコリスが笑顔で俺に飛びついて來た。俺の顔が一気に熱くなつてリコリスに聞こえるんじゃないかと いうくらい胸が高鳴つた。

そんな様子を見ていた阿呆騎士が一言呟いた。

「あの『紅蓮』が、なあ……」

俺はアソツの言つた意味を理解することができなかつた。

## 第十四話 僕自身の変化 (ラグ side) (後書き)

読んでくださってありがとうございます！  
ポイント評価や誤字指摘などしていただけたと嬉しいです！

## 第十五話 謁見反対！－容量オーバーです。

「あの『紅蓮』が、なあ…」

一緒に来てくれるってラグが言つてくれて嬉しくて思わず抱きついた時にルキアがぼそつと呟いた。え？ラグが何て？よく聞こえなかつたんだけど。

まあ、いいや。それより今後の予定を確認しなくちゃ！

「ねえルキア、出発は何時にするの？」

「そうだな…一週間後になるとと思つ。それまでに隊を編成しなきやなんないし、高梨には陛下と謁見して貰わないと…」

「おい！何でリコリスがレスト王に謁見しなきやなんねーんだよー！」

私もびっくりしたけど、ラグが過剰反応したのは何で？やっぱり過保護だから？

ルキアは溜め息をついて、呆れ顔だった。

「少なくとも、馬鹿傭兵なら分かるだろ？「誰が馬鹿傭兵だつて？」あー高梨、そいつの事は無視して良いぞ。えつと、お前が妹姫として俺達がリーゼアに送るなら、当然、陛下にも説明しなきやなんなくなる。結果的には証明するために高梨も陛下に謁見しなきやいけなくなる」

ルキアが言つた事は理解できたけど、妹姫というだけでこの國のお偉いさんと対面しなきやいけなくのは平凡を貫きたい（この時点でアウトだと思つけど）私には無理。

真剣そのものでルキアを見る。

「『めん、やつぱりいいや。私にはそんな度胸無いし兄さんの所へ行きたいだけだから』

そう言つこと、眞面目だつたルキアの顔が微笑んだ。

「良かった。高梨ならきっとそう言つてくれると思つてた。東条の奴から陛下には合わせるなつて言われてたし

「遙から？」

遙からそういう連絡が入つていた事に驚きを隠せなかつた。

遙の事はもう許してゐるけど、あの時の憎しみのこもつた笑顔の意味が未だに分かっていないのが現状だつた。遙との連絡方法があるのなら何時か分かるよね。

「ああ。詳しい事は此処では言えねえけどな。丁度良い機会だし、紫苑先輩にも呼ばれている事だし、騎士団辞めてお前達に付いて行くよ。良いだろ？」

そういうえば、ルキアも兄さんと同じでバスケ部だつたんだつけるキアにとつては兄さんは尊敬できる人（私はそんな事一欠片も思つて無いけど）だから“高梨先輩”ではなくて“紫苑先輩”つて呼んでるんだつて。

一緒に来るぶんには、私は構わないけど…。そう思いながらラグの方を見た。ラグは難しい顔をしてたけど、答えが見えたのか一つ頷いて口をきつた。

「正直、ムカつく奴だけど頼りがいはあるからな。お前、ゼッテーリコリスに変な事吹き込むなよー『氷刃』」

ラグつてルキアの前では素直になれないだけなんじゃないかな？

だつて今、ルキアの事認めてたみたいだから。  
私は一人の手を握つて笑つた。

「それじゃあ宜しくね！ラグ、ルキア」

二人はちょっと驚いてたけど、笑つてくれた。うん、二人の笑つた顔が大好きだよ。

「ああ、宜しくな。ラグ、“リコリス”」

「俺も。宜しく。ルキア、リコリス」

なんだかんだで仲の良かつた二人と兄のいる帝国リーゼアへ向かう事になつた。何か凄くドキドキする！

## 第十五話 謁見反対！！容量オーバーです。（後書き）

お気に入り登録＆評価して下さった方ありがとうございます（ーーー）また、感想や誤字指摘などありましたら宜しくお願いします！

これからも当作品を宜しくお願いします！

## 第十六話 仕事を見つけました。

薄桃色の花咲く丘

## 僕等通り会えた奇跡

一緒に笑い合へ」とか

## 儀の田舎になつて

さつきできたばかりの歌を歌つてた。

あれから、ルギア達と今後の事を話し合いで、私とテグは宿へ来た。もちろん、ファージの時と同じで私の部屋はラグの部屋の隣だ。宿ではやることが無かつたから結局こうやって歌を作っていた。

「開いてるよー！」

歌つていたら、明日の予定を伝えにラグが部屋を訪ねて来た。アージの時は私が寝てる時に来たらしくて、次の日に予定を伝えたラグを叱つたから私が起きてるこの時間に来てくれたのかも。ちょっと成長したのかなって思うとなんだか見ている方も嬉しかつた。

「明日は予定通り傭兵ギルドに行つてリコリストの登録と仕事を探そ  
う。そういえば、ギルドランクについては話したよな?」  
「うん、私は背理たてだからランクGなんでしょう?」

正解とも言つようにラグは頷いた。

確認が終わつた後、何かを思い出したようにラグが私の顔を見る。

「どうしたの？」

「いや…さつきつ『リスの歌』が聞こえたから、また新曲できたのかなって思つただけだぜ？」

ラグの答えに顔が熱くなつた。もちろん、羞恥心で。

ラグにも聞こえてた=外にだだ漏れ=超恥ずかしい！

いやああああ！ハズい！ラグならまだしも他の人にもきっと…。

うなだれでいる私の心境を知らないラグが今の状況の私にとつての禁句を言つてくれぢやいました。

「あの歌、もう一度歌つてくれねえか？」

恥ずかしいから嫌！って言おつとして顔を上げたけど、真剣な翠色の瞳が私の意見を封じてしまった。

そこまで見つめられてしまつたら、流石の私もギブアップです。

「もう、しょうがないんだから。でも音漏れするのやだな…」「じゃあ、消音の魔法をこの部屋にかければいいだろ？」

ナイス、ラグ君。その考えは有りませんでした。その案を実行すべく、ラノベ知識からイメージした。

「溢れ出る音を遮断せよ『サイレン』…」

一瞬目の前が光つたけど、何事も無かつたかのように収まった。これで音漏れしない筈。嗚呼、なんて素敵なの魔法つて！口には出なかつたけど表情には出たかも。だつてラグ、今にも吹き出しそうだもん。

「それじゃあ、歌つてくれ

一つ頷いて、息を吸つた。

閉じた瞼開いたら

全て新しい世界へ踏み込んでた

何もできない僕は

一人ただ悲しくて泣いてた

風のような君の手を掴んで

駆けるように僕の目に映る世界は

温かいもので溢れてる

それを教えてくれた君に伝えたい

胸に秘めた君への感謝

精一杯に伝えようとした

風がまるで悪戯のように

僕の言葉をかき消しました

薄桃色の花咲く丘

僕等巡り会えた奇跡

一緒に笑い合うことが

僕の日常になつてました

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

私達は現在、王都の傭兵ギルドにいます。今日の日中では仕事探しと私のギルド登録。

「よつじや、傭兵ギルド王都本部へ

受付のお姉さんに挨拶されて思わず私もお辞儀をしてしまった。

「彼女の手続きをして欲しいんだけど…」

「可愛らしいお連れさんですね。畏まりました。ここに必要事項をお書き下さい」

可愛らしいお連れさんと言われて恥ずかしくて私は俯いてしまった。そんな私を見たラグは少し笑うと、私の代わりに書類を書いた。この世界の字はアルファベットに似てたけど、やっぱり覚えられなかつた。（読むことはできるけどね。）

書き終わった書類と引き換えに桃色のカードが渡された。

名前：リコリス  
・  
・  
・  
・  
・  
・

職業：魔法士

ギルドランク：G

・  
・  
・  
・  
・  
・

私の名前と職業とギルドランクが書かれていた。いわば身分証明書だね。ラグから聞いた話によると、検問所で見せればパスできるんだつて！

これで私もラグのお手伝いできるね！



## 第十六話 仕事を見つけました。（後書き）

今回も活動報告に歌詞を掲載しているので興味のある方は覗いて見て下さい。

## 第十七話 初の依頼です。

受付で登録を終えた後、ラグが奥の方へ歩いて行くのを私も後に続いて奥の方へ行った。

ギルドの奥には大きなコルクボードが八つあって、一つだけ除去どのコルクボードにも沢山の紙が貼つてあった。多分あの紙に依頼が書かれているんだと思う。さっきから気になっていたコルクボードを見ていると、私の視線を辿つたらしいラグが説明してくれた。

「あのボードにはSランクの依頼が貼つてあったんだけど、今はSランクだけは空席だから何も貼つて無いんだ」

「どうして今は空席なの？」

「前にも話したと思うけど、Sランク傭兵はギルド設立以来一人だけ。そのSランクだった人は現在は別の仕事をやっているから…だな」

そう言って、ラグは何も貼つて無いコルクボードを見ていたけど暫くして何かを納得したように頷いて別のボードの方へ行つてしまつた。慌てて追いかけようとして思いつきつづいてしまつた。

「どわあああ！…」

私は衝撃を予想して目を閉じたけど一向になくなかった。それにお腹あたりに固い棒のようなモノが支えていた。

私が顔を上げるとそこには

「大丈夫か？」

ラグの顔がありました。しかも、ち、近い…もう、ショート寸前です。思考停止しそう…。

「だ、大丈夫だから！」

「本当か？」

「本當だもん！」

私はラグから離れると、依頼が貼つてあるボードの一つに行こうとした。…………うん、行こうとしたんだよ。

Gランクの依頼があるボードを見ようとしたらいきなり（もちろんラグに）掴まれて引っ張つていかれた。

「俺も一緒に依頼受けるから、ランクDあたりから選ぼうぜー。」

「や、私ランクG…」

「実力がありや、問題ねえつて！」

「大ありですから～～～～～！」

周りの人達は何か微笑ましいものを見るように笑つていた。ラグが他人に興味を示すどころか世話を焼く事すら今まで無かつたかららしい。

後になつて他の傭兵の人に聞くまで私は知ることは無かつた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

そのまま引っ張られて私は今、ランクDの依頼があるボードの前に来ています。

当然のことDランクの依頼を受けるつもりは無かつた私は、適等に依頼を見てたけど、隣の青年ラグはファーティの武器屋の時同様目

を輝かせて依頼を選んでいました。

思わず「子どもかっ！」って突っ込んでやりたい所だけど、私自身どういう依頼がいいのかさっぱりで、馴れてるラグに任せているような状態だから突っ込もうと思つても突っ込めない。

暫くすると、ラグはボードに貼つてあつた紙を一枚選んで私に差し出してきた。

「こんなのはどうだ？」

「ん？ 何々…」

ラグから紙を受け取つて内容を確認する。確認した瞬間、叫びたくなつたけど、なんとか押し止めた。

・ · · · · ·

依頼難易度：D

依頼内容：“精霊の森”でエレメントの討伐

報酬：銅貨五十四枚、一人あたり七十ギルドポイント

・ · · · · ·

現代日本人の私には無理そうな依頼内容だった。でも、他の依頼内容に比べて報酬が結構お高い。日本円にするとざつと五千四百円くらいだった。

ラグに面倒を見て貰つてはいる身だから、本人はいいと言つていても返した方が絶対良いに決まつてる。ならば背に腹は代えられない。

「ラグ、私この依頼受ける！」「分かった。無理するなよ」

微笑んだラグは私の頭をそっと撫でると依頼受託の受付をしに行つた。その彼の背中がやけに広く見えた。

## 第十七話 初の依頼です。（後書き）

ちなみにギルドポイントは、ランクを上げるための点数で

G F 100ポイント  
500ポイント

E D 1000ポイント  
2500ポイント

C B 5000ポイント + Bランククリア  
10000ポイント + Aランククリア

A S 100000ポイント + Sランククリア + オーナ  
ーズクエストクリア

という条件でランクが上がる設定になっています。（本編にもその  
うち記載予定）

そう考えると馬鹿兄紫苑はすごかつたんですね…。

## 第十八話 紫苑といつ名の男について

依頼を受けた後、早速私達は精靈の森へ向けて出発した。精靈の森は王都の北門を出てすぐの所にある小さな森で、依頼はすぐ終わるんだって。精靈や靈獸が生息しているから“精靈の森”と言つらし。

とても幻想的な所なんだけど、最近は瘴気の影響で魔物化した精靈“エレメント”が増えてきているから立ち入り禁止になつてしまつているんだとか。

王都の北門へ向かつ途中でラグが私に話しかけてきた。

「今、空席になつてゐるランク傭兵つて、シオンだつたんだよな」「えつ！？」

あまりにも唐突な言葉に私はラグの方を見てしまった。今までどうしようもないとつっていた兄が、こちらでは伝説に匹敵するような武勇伝を更新し続けているのだから。

隣の国の皇帝陛下つて言うだけでも度肝を抜かれたのに（本人いなide）

ただ一人のランクというケタ外れなランクまで持つていたと聞いて腰を抜かさない人がいたら、今すぐにでもこの話を聞かせてやりたい。

そういうえば、うちでの兄について私は何も知らない。『シオン』と呼んでる時点ではラグは兄と仲が良いと判断した私は思い切つて兄のことを聞いてみることにした。

「ねえラグ、うちでの兄さんつてどんな感じだつたの？」  
「うちでのシオン？えーと一言で言えば撃破りなヤツだな」

ただ一言『撃破り』と言われてもピンと来なかつた。私の様子を見てたラグは悪戯が成功したかのようないやついた顔をした。

「道すがら、アイツのことについて教えてやるよ  
「ありがとう！」

笑つたラグに私も笑つて返す。  
「一人して二二二二してたから端から見ればど二二二のバカツプルだよね。そんな関係じゃないのに…。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

森へ続く街道を歩きながらラグは兄のことを話してくれた。

「傭兵シオンは、剣の腕も魔法の腕も凄くて頭の切れる傭兵だつたんだ。パーティーを組んだ時的確な指示を出していたのはシオンだつたし、必要ならば援護にも回つた。兎に角何でもできるヤツだつたよ」

血慢気に言つたラグの方をまじまじと見てしまつた。家にいる時の兄とは全くの別人のよう…ううん、全くの別人だつた。

「仕事しか頭に入つてなかつたみたいに動き回つてたな。あ、一回だけ働きすぎでぶつ倒れたんだっけか？」

やつぱりそうだ。私の知つてる兄とは違うんだ。

なんとなく道の脇を見たらこの世界の紫苑の花が咲いていたけど、

部屋の窓辺に飾つてたのどビコが違つて見えたのに対してなんか寂しかつた。

「特異点だつたみたいで、見たこともない生き物を出したりしてたり、再生能力とかあつたり…」

「ちよつと待つた！」

「ん? どうした?」

「一体何の話をしてるの?」

「シオンの話しだけど」

何ですか!? ウチの馬鹿兄貴は人外化け物ですか!?! つて、『捉破り』はそこか! 召喚術? 再生能力? どういう違法ソフトウェアを使つてくれたんですか!? 何ですかそのチート設定。よっぽどのことが無い限り無敵じやないですか!

他人どころか人ですら無いような錯覚を覚えたのは私だけだろうか。うん、今度ルキアに聞いてみよう。  
田を白黒させたり百面相をしてる私を不思議に思つていたラグは今度は質問をしてきた。

「そついえば、リコリスのいた世界でのシオンってどんな感じのヤツだつたんだ?」

私は一言だけ答えた。

「駄目人間」

「えつ?」

私の一言に驚きを隠せないラグの顔が可笑しくて笑つてしまつた。私のいた世界での兄の話しあつと思つたけど、その前に精霊の森へついてしまつた。



## 第十八話 紫苑といつ名の男について（後書き）

実は、この小説を読んでくれた友人からアドバイスをもらつて十七話からちょっと改善してみた（あくまでも作者はそのつもり）のですが、正直のところどういういつふうにしたら読んで下さっている皆様に楽しんで頂けるか自分だけだとよく分からんんですよね…。といふことだ、

「ソレをもう少しこいつとしたほうが良い…。」

とか

「こいつしたらもうと面白い…。」

などの「」意見「」感想をお待ちしております！

P・S・よろしければポイント評価の方もお願いします…。.

第十九話 精霊の森で。（前書き）

投稿が遅くなつてごめんなさい。（Ｔ^Ｔ）

## 第十九話 精霊の森で。

結局、私の世界にいた時の兄の話しができなかつた。ラグの驚いた顔が見れなかつたのが残念だよ。

「それじゃあ、リコリスト入るぞ」

「うん」

私達は神聖な筈なのにどこか暗い森の中へと入つていつた。森の中へ入つて行つて、私達は愕然とした。とても幻想的な筈なそこは、黒に近い紫色の霧が禍々しさを醸し出して近寄りがたい雰囲気だつた。

その雰囲気のせいなのか無意識のうちに一步下がつてしまつた私の手をラグはぎゅっと握つてくれたけど、微かにラグの手は震えていた。

意外だつた。やつぱりラグにも怖いものがあると思うと何故だかほつとしてる私がいた。

ラグと私の目が合つて、お互に微笑んで頷く。そして、私達は手を堅く繋いだまま森の奥を手指した。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「岩よ、彼の者を碎け『ロックシユート』！」

私の目の前に魔法陣が展開されてそこから十数個の拳くらいの大きさの岩が生成された。

「行け！」

号令と共に開いている左手を相手の方へ突き出すと拳くらいの岩は突き出した方へ飛んで行つた。

紫色の水晶が集合したような魔物エレメントは私の放った岩の飛<sup>ふ</sup>礫に当たつて、次々に砕け散つた。

エレメントは属性で色が別れていて、赤が炎、青が水、今倒した紫が雷、橙が地、緑が風、黄色に近い白が光、紺に近い黒が闇、色が無くて透明なのが無なんだとか。もつとも、光、闇、無についてはめつたにいならしい筈なんだけど…。

一方、私の後ろではラグが風属性を相手にしてた。

『燃やせ…』

ルキアと喧嘩した時のように長剣に魔力を流し込んで、一気に置み掛ける。田に留まらぬ速さで一閃する。ラグの速さに追いつけないのか長剣に纏わせた炎が尾を引いて剣の軌跡を辿つた。

炎の軌跡が消える前に次々に一撃を加えていく。ラグの周りの炎の線が龍が舞つていて見えた。

つて、そんなボーッと見てる場合じゃなかつた！錐がないつていふくらいの数のエレメント達が次々と攻撃を仕掛けてくる。

「バリア！」

面倒なので詠唱破棄。私の前に透明な壁が展開されて、エレメント達の攻撃を防いだ。

私は早口で詠唱する。

「水で生成されし矢よ、

来たれ闇に染まりし剣よ、  
破邪の力をその身に帯びて、  
妖魔が宿しその力にて、  
魔なる者を貫け

偽善の光をかき消せ

『スプラッシュユアロー』！

『ダークネスソード』！

流石に一重詠唱は長い！時間を凄く費やした気がしてなりません。  
私の正面には青い光を帯びた魔法陣が、エレメント上空には黒い  
魔法陣が浮かび上がった。次の瞬間、青い魔法陣から無数の矢が、  
黒い魔法陣から無数の剣がエレメント達を襲つた。  
そこにいた炎のエレメント達とめつたにお田にかかることのない  
筈の光のエレメント達はガラスが割れるように砕け散つた。

「！」の辺りは終わつたみたいだよ、ラグ

そう言つてラグの方へ寄つて行つた。ラグは剣を納めながら私の  
方を向いた。

「これじゃあ、錐がないな。浄化の魔法が使えたらいんだけどな  
「そんな魔法があるの！？」

「あるにはあるけど……」

「今まで通りイメージすればできる？」

ラグに浄化の魔法があると言われ、思わずラグに迫つてしまつた。  
慌てて私は身を引いたけど、ラグはその後も固まつていた。

「ごめん。で、ラグ聞いてる？」

「ああ、悪い。ちゃんと聞いてた。できない事はねえけど、魔力も

かなり使うし、イメージしにくい

「分かった、ありがとう…駄目もとでやつてみる

「ああ、分かつ…、ええ…？ オイ、ちょっとまた…」

私はラグの近くから離れるとすぐに詠唱を始めた。

「天地を包む清めの光よ、此処に集え。いかなる者にも苦しみを与える邪氣を払い、この地の命の流れを戻せ『クリアブレス』！！」

私が叫んだと同時に私を中心に魔法陣が森の隅まで展開されてそこから真っ白な光が発せられる。あまりにも眩しい光に目を開けられなくなつた。

第十九話 精霊の森で。（後書き）

ポイント評価やご感想お待ちしております！

第一十話 チートじみの兄だけではあつませんでした。（前書き）

更新遅くなつて、みんなさー（トトト）  
定テでした。

## 第一十話 チートじみるのは兄だけではあつませんでした。

「うわあ…」

田を恐る恐る開けるとさつきの禍々しいのとは打つて変わって神秘的な明るい森が私の田の前に現れていた。

「綺麗…」

「リリス！」

少し離れた所にいたラグがこちらへ駆け寄ってきて…

「全く…心配したんだぞ…」

力一杯抱きしめてきた。ラグの力が強くて私はもがいてやつと顔だけ出すことができた。けれど、ラグは未だに私から離れそうになかつた。

「ええと、ラグさん、苦しいんですけど…」

「ああ、悪い」

そう言つてラグはやつと離してくれた。あれ？顔赤いよ。ラグ、熱あるの？

顔を逸らしてたラグが、何かに気づいて長剣の柄に手を掛けた。私もサーベルの柄に手を掛けるとラグと同じ方向を向いた。

「どうか警戒を解いて下さい」

私達が警戒してた方から、優しそうな温かい声が聞こえてきた。完全ではないけれど、警戒を解いてサーべルの柄から手を外した。ラグも手を外したけど、殺氣のようなものを未だに放っていた。それでも充分怖いよ、ラグ君…。

奥から現れて来たのは、夜のような藍色の瞳で綺麗な緑色の長い髪を上方で一つにまとめて一種の芸術品とも言えるような髪飾りをつけていた女人だつた。もちろん美人さんだ。

……私が男だつたら速攻アウトだつたな。

女人の両隣には銀狼が一匹、彼女を守るように立つていた。

「お初にお目にかかります、『紅蓮』ラグナス様、『巫女姫』様」

私の頭には、大量の疑問符がついた。ラグナスって誰?え、巫女姫?

なんとなくラグを見た。ラグは正面を向いたまま顔を青くして驚いて固まっていた。驚いてた顔は段々と険しい表情に変わる。

「何故、俺の本名を知つている?」

「え!? ラグナスってラグの本名なの?」

「おいおい、この流れで気づかねーのかよ…」

「分かる訳無いじゃん!」

結局、私のボケでこの場の緊張感がどじぞくへやらと吹き飛んでしまつた。

ラグもといラグナス……うん、馴れてるし、呼びやすいからラグのままでいいや。ラグは自分の額に手を当てて溜め息をついた。それを見ていた女人人は私達を見て声を押し止めて笑っていた。

「ふふ……申し訳ございませんでした。改めまして自己紹介をさせて頂きます、私はシルフィード、風の上位精靈でこの森を統治する

者です「

そう言つと、女人…シルフィーゴさんは優雅に礼をした。このひと、精靈だつたんだね……。更にシルフィーゴさんは話しを続ける。

「それでは、何故私がラグナス様のお名前を存じていいことについてですが、私は風の上位精靈。他の風の精靈達に話しを聞いておりましたから、あなたがどんな道を歩んで来たのか知っていますの」

ラグは納得したように何度も頷いてシルフィーゴさんの話しを聞いてた。私も“ラグナス”のことは納得した。だけど、さつきから気になつていたもう一つの単語“巫女姫”は一体何を示しているのか検討が全くつかない。

「あのー、 “巫女姫” って」

「貴のことです、賢帝の妹さん。まだハルティリカ様…貴女のご友人の遙様からはまだ何も伺つていらつしゃつていないのでですか？」

何のことですか?と聞く前に答てくれた。あれ?遙の名前が何か長くなかつた?…………って、そ・う・じや・な・く・て、私が“巫女姫”!?何それ、美味しいの!?…………はい、ごめんなさい。混乱してます。

シルフィーゴさんの答えを聞いたラグが代弁してくれるよつに聞いた。ただ単にラグも驚いてるだけなんだけど……。

「リーリスが巫女姫つてどうことだよ!そもそも、巫女姫って何なんだ?」

藍色の瞳からさつきの柔らかい雰囲気が消え、真剣そのものが露

わになつた。纏つた霧囲気も威厳があるように見える。

「巫女姫とは、この世界と平行に存在する世界に生まれた者で唯一  
単独でこの世界を覆う結界“世界壁”を貼れる方のことで、巫女姫  
が持つ魔力は無限と言われています。先ほどの浄化の魔法で確信致  
しました」

ラグと顔を見合させる。ええと、それって私もというよりも私の  
知り合いってチートじみてるんですね……。

じゃなくて！私の特殊能力は一体何のバグ現象ですか！？

第一十話 チートじみてるのは兄だけではあつませんでした。（後書き）

誤字脱字がありましたら、「連絡お願いします。  
また、「感想、文章評価お待ちしております！」

## 第一一話 私を突き落とした君の願い（前書き）

更新遅くなつて「みんなさー（^-^）

風邪引いたっぽいです。皆さんも気をつけて下さいね。

## 第一一話 私を突き落とした君の願い

自分の役目（？）について驚いていたら、急に力が抜けて目の前が真っ暗になつた。

「大丈夫か！？」

最後にラグの声が聞こえたけれど、なんか引っかかるものがあつたのに思い出せない。

――何か大切なことなのに……。

閉じていた瞼を押し上げて体を起こした後、目にした光景に声が出なかつた。

一言で言い表すなら、“天国”。そのくらい綺麗な庭のような所、それもかなりの広さがある場所が映つたのだから。

「目が覚めた？」

懐かしい声がして、私は振り返つた。  
案の定、声の主が立つていた。

「遙……」

「久しぶりね。元気だつた？」

声の主、東条遙はばつの悪そうな顔をして私を見ていた。当たり前か。だって、何も言わずに私を異世界に突き落としたのだから。

「えっとね……その……」

「もう、怒つてないよ。遙も何かあつたんでしょう？」

「ごめんね、ありがとう」

遙はそつと笑うと未だに座り込んでいた私を引っ張り起こした。立ち上がった私は遙と顔を見合させて、あの私の世界にいた時の日常みたいに一人で笑いあつた。

笑いを収めた遙が話してくれた。

「まずはあの世界の事について。あの世界はテスラっていう名前で私達のいた世界の平行世界なの。私達の世界とテスラを移動できるのは、私が認めた人だけ。今は……あなたを入れて五人かな？」

「私の他にも四人……」

私は考え込んだ。兄とルキアの他にあと二人来ている事になる。私の考へてる事が分かつたみたいで遙は真面目顔で答えてくれた。

「一人はもう既に会つてるとと思うけど、『氷刃』天城ルキア。あと、あなたのお兄さんの『賢帝』高梨紫苑。それと去年交換留学で來てた『聖騎士』ディムナ・リアトリス。あとは私の小学校時代の友人の『天使』藍染悠里。そしてあなたよ」

私を指されて言われた言葉でパズルのピースがはまつた。

「『巫女姫』高梨利子」  
タカナシリコ

ようやく分かつた私の名前。兄さんが大好きだった名前。そつか、

私は高梨利子なんだ。

なんとなく呼ばれても違和感がなかつた。当たり前か、だつて私の本来の名前だもん。

「ねえ、遙。何で私は自分の名前を忘れてたの？」

遙に率直に聞いた。テスラへ来てから抱いていた疑問をぶつけてみる。遙はものすこく悲しそうな申し訳なさそうな顔をした。

「利子は忘れてたんじゃない。私が消したの」

「そうなのー？」

遙はゆつくりと首を縦に振つた。私は何も言えなかつたけどいつものすこい顔をしてると思つ。遙がまたばつの悪そうな顔してゐるか。

「本当にごめんな、利子。でもそうしなくちゃいけなかつたの」「どうして？」

「利子の名前はテスラでは強い力があるの、テスラを変えてしまつくらいの。だから…」

「だから私の記憶から名前を消したのね」

遙は今にも泣き出してしまうやうだった。そんなことで遙が泣かなくてもいいと思つのに…。遙は凄く優しいから、人の為なら泣くことだつてできる。今だつて多分、私の為に…。

あれ？でも何であの時あんな憎しみに満ちた笑みを見せたんだろう？

私があの時の事を考えていたら一気に景色が一変して真つ暗になつた。

「もう、時間が無いみたい。いい？絶対レストから出てリーゼアの紫苑君の所へ行つて！それから、精神が向こうに戻つたらまた名前だけ忘れると思うけど私がわざわざ言つた事を忘れないで！」

いつの間にか私の足元にできていた大穴に吸い込まれていく。落ちて行く中で確かに遙の声が聞こえた。

「お願い！！レスト王国を止めてテスラを救つて！！利子おおおおおお…」

「――リスト、リーゼア」

誰かに揺すぶらされて私は覚醒した。私の顔を覗き込むように翠の瞳が見下ろす。つて、ヤダ！顔近い！！顔が一気に熱くなつて心音が何時よりも早く大きく鼓動する。

そんな私の表情を見たラグは心配そうな顔をした。

「リーゼア、大丈夫なのか？もしかして具合悪い？」  
「そんなこと無い、そんなこと無いから！」

慌ててラグから離れて立ち上がつた。そのまま正面にいたシルフィーユさんを見る。先に話したのはシルフィーユさんの方だった。

「ハルディリカ様にお会いになつたのですね」

「はい、会つて私が名前を忘れた理由……つづん、遙が私の記憶から名前を消した理由を知りました」

シルフィー＝ゴさんはそつと微笑んだ。

「…………… そうですか」

そして、私はラグの方を向いた。

「ラグ、私は遙に…友達に頼まれたの『レスト王国を止めて』この世界を救つて』つて。だから、リーゼアの兄さんの所に行くよー兄さんにこの事を伝えに」

「分かった」

ラグはその一言だけだった。でもすぐぽかんとした。

「そういうえば、リーリスのその友達って何者なんだ？」

「あーー！ 聞くの忘れてたあああー！」

失念してました。

第一二話 これ、リーゼアへ……。（前書き）

今回は途中から遙視点になります。

## 第一二一話 いや、リーゼアへ……。

精霊の森の依頼から一週間が経つた。

傭兵の仕事にもだいぶ慣れてきたと思う。ラグが結構無茶苦茶な依頼を見つけてくれちゃうのでお陰でランクがすぐに上がりました。依頼内容は基本的には戦闘をするものが多くて、上の方のランクになると戦争や奴隸商絡みの汚い仕事の依頼なども舞い込んでくる。ラグや兄は極力避けていたらしけどやつたことがないわけでは無いんだって。

この世界テスラには、冒険者は無いらしい。だから、冒険者紛いの依頼も傭兵ギルドの依頼掲示板に張り出されてる。初めてやつたエレメントの討伐はその類いに入る。

でもそんな傭兵生活も終わり。今からこのファーランドの街を出る。意外に短かったような気がする。

王都の北門で待っていたらその人は来た。

「『めん、遅くなつて……ん?』

「どうしたの?」

「その手の何だよ」

今まで私達を待たせていた人、天城ルキアは私の腕を指差した。

「キュー！」

私の腕の中の白いキツネもどきが可愛らしく鳴いた。このキツネもどきは本当はちゃんとした靈獸で本来はもつとおつきい。シルフィーさんの命令で私を守護するために一緒に来た風属性の靈獸さ

んです。その証拠に尻尾と耳と首回りの毛の先の色が緑色をしています。歩いていてもちゃんとついて来れるのに私が抱っこしているのは単にこのモフモフがたまらないから。

「あ、この子のことはこの子は風の靈獣のフーガ。私の護衛なんだつて！」

「なんだつて…つて何か軽くないか？ノリ」

「まあ、良いんじゃねえか？浮かれてるだけだろ」

三人プラス一匹で楽しく話していたけど、だいぶ落ち着いてきた。

「それじゃあ、行こうつー。」

「ああー。」

「キューーー。」

私がかけ声をかけてファーランドを出発した。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

此処は、私達が住んでいる世界アースとテスラの狭間の世界。この間、私が利子を呼び寄せた世界もある。

私は白い椅子に座つて白いテーブルの上にある水晶を見ていた。水晶に映つているのは勿論利子達。今は天城君と行方不明のレストの王子、それと風の靈獣がいるから今のところは大丈夫だと思う。シルフが任せた子なら尚更。

「遙ちゃん、何見てるの？」

「紫苑君、来てたんだ」

後ろから声をかけてきたのは利子の兄である【賢帝】高梨紫苑だつた。

彼はある度にこの狭間の世界に来る妹よりも規格外な奴。

「うん、まあね。レストの状況を聞きたくて。何だか不穏な動きがあつたみたいだから」

「そうなの？後で見ておかなくちゃ。今、丁度利子達の様子を見ていたのよ。天城君とレストの王子と一緒に、シルフが護衛に風の靈獸をつけたから心配は無いわ」

「ルキアとラグが？何でまた」

紫苑君は不思議そうな顔をして首を傾げている。何だかその表情が今さつき水晶で様子を見ていた少女と重なった。まあ、兄妹だから当たり前か。

可笑しく思つたけど、声を上げて笑うのをじらえて、微笑みの中に隠した。

「さあね、運命なんて流石の私にも分からぬいわ。さて、レストの様子でも見ましよう

「…………そうだね」

紫苑君が頷いたのを見て、また水晶の方に向き直つた。

——運命はどう動くか、どう残酷になるか分からぬいけど、どうか利子、無事でいて。



## 第一二話 これ、リーゼアく……。（後書き）

お気に入り登録されてる方そして読んで下さっている方本来にあります  
がとうござります（ ）

これからも『彼岸花の恋歌』を宜しくお願ひします（ ）

閑話 ラグとクリスマス (ラグ  
s.i.d.e (前書き)

クリスマス特別閑話です。  
三本立てでお送りします。

## 閑話 ラグとクリスマス (ラグ side)

「そういえば、もうすぐクリスマスだったな…」

雪が積もり始めた窓を見てポツリとルキアの奴が呟いた。それを聞いたリコリスがルキアに聞き返す。

「え！？クリスマス？こっちにもあるの？」

「いや、元々はねえよ。ただ、最近では紫苑先輩がリーゼアで流行らせてるみたいらしいけど」

「本当、イベント大好きだよね。あの馬鹿兄貴」

そういうリコリスは溜め息を一つはいた。

そんな二人の会話を聞いて一年前の事を思い出した。そういえば、クリスマスのイベントで俺もシオンに驚かされたな…。

====

その日も雪が積もっていたと思う。

宿から外へ出た俺は依頼を受けにギルドへ向かうところだった。正直雪の中を歩くのは辛かつたけど、何時か俺の目的を達成するために金を貯めておきたかったから仕方なしにギルドに行くことにしたんだつた。

今日はどんな仕事をこなすか歩きながら考えていたら後ろから声をかけられたら。

「久しぶりだね、ラグ」

「シオン！！」

振り向いてみたら、今は隣の国で王様業をやっている友人が目の前にいた。

本当にあなたは皇帝ですか?と言いたくなるような一般人と変わらないくらいのラフな格好をしていた。

シオンは二コ二コしながらこっちに駆け寄つて来る。

俺の前に来ると綺麗にラッピングされた長めの箱を差し出してきた。誕生日でもないから勿論俺は怪訝な顔をした。

「シオン、俺の誕生日今日じゃないけど…」

「うん、知ってるよ!でも今日は僕の世界では特別な日だから」

「こいつとした顔でプレゼントを渡されたので渋々受け取った。俺が受け取ったのを見たシオンは一人で喋りだした。

「今日はね、僕の世界では“クリスマス”って言つて好きな相手と一緒に過ごしたり、仲の良い友人や家族にプレゼントを渡したりする日なんだ!だから、今日は僕からラグにプレゼント」

「へえ、そうだったのかあ…………。つて俺、説明求めてませんでしただけど……。」

そう突っ込もうとしたけど「じゃあね」つて言つてどこかへ行つてしまつた。

=====

懐かしいな。そういえば、中身は短剣だつたな。今でも愛用して  
る赤がベースで金のラインが入つたやつ。びっくりしたけどやつぱ  
り嬉しかつたし…。

思い出に浸つていながら未だに喋つてゐる一人を眺めてた。何だ  
か楽しそうだし俺にはよく分からぬクリスマスの話題で盛り上が  
つていた。

「ねえ、ルキアはサンタさん信じてる?」

「んなもん信じる訳ねえだろ。あんなガキの妄想  
「ガキの妄想つて、ちよつとルキア酷くないー?」

何か言い争い始めたけど良いのか?とりあえず放つておこ  
う。

しばらくしてピンときた。

俺はコートを取り、出かける準備をする。

「ラグ、どうか行くの?」

「ああ。すぐ戻るから安心しろよ」

「誰がお前の心配何かするんだよ。でも、気をつけに行けよ」

俺は一人に見送られて宿を飛び出した。一人へのプレゼントを考  
えながら薄暗くなつてきた町中を子どものように駆けて行つた。  
ルキアには万年筆、リコリスにはブレスレットでも買ってプレゼ  
ントしようか。考えるだけでわくわくしてきた。

閑話 ラグとクリスマス（ラグ シンセペ（後書き）

宜しければ、ご感想と作品評価をお願いしますー。

閑話 ルキアとクリスマス（ルキア side）（前書き）

クリスマス特別閑話その2です。

## 闇話 ルキアとクリスマス(ルキア side)

ラグの奴は「コートを着るなり出かけてしまった。もしかしたらアイツもクリスマスの事を知ってるのかもしれない。

「今は向もできないからちよつと寝てるね」

「あ、ああ」

そう言つなり高梨は自分の部屋へ戻つてしまつた。  
本当にやることがなくなつてしまつた。仕方なくベッドに寝つ転がつてぼつと見てたけど、クリスマスから連想してあるものを思ついた。

ベッドから飛び起るなり、コートをひつつかんで走りながら着込む。

商店街で必要な材料を買って宿に戻つた俺は、宿屋の厨房を借りて早速作業に取りかかつた。

「アイツ等、どんな顔するかな?」

そんな事を思いながら、生地を作つていた。

実はこいつやってケーキを焼くの初めてじゃないんだよな。

====

「ルキア、ケーキ作るの手伝つて!」  
「はーい!」

当時まだ五歳だった俺はプレゼントの他に母さんとクリスマスケーキを作るのが楽しみだった。

確か、七歳の時にブツシユドノエルを作った気がする。  
一生懸命生地を混ぜたり、悪戯でチョコクリームを舐めたり、クリームを塗つてロール状に丸めたり…。  
母さんと作るのがとても楽しかった。

「お兄ちゃん、美味しい！」

「ルキアは上手いな」

「ルキアは将来はパーティシエかしら？」

家族に誉められて、凄く照れくさかったけど同じくらい嬉しかったのも覚えてる。

俺が菓子作り魂に目覚めたのもこの時期だった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

昔の事を思い出してたらいい匂いがしてきたからオープンの様子を見た。良い色になつていたのを見てそろそろ取り出しても良いと思つ頃だった。

昔作つたようにスポンジにクリームを塗つて、ロール状に丸めて……。飾りをつけたら出来上がりだーうん、我ながら上手く作れていると思う。母さんと作った時よりも美味そうに見えるのは自惚れだらうか。

調子に乗つてクリスマス料理も次々と作つていく。シャンパンはどうしようもないから買ってきてたけど、作り終わる頃にラグが帰つて来た。

「おいルキア、これ何だよ！」

「俺達の世界では今日“クリスマス”っていうイベントがあつてさ。その特別ディナーだよ。部屋に持つて行くの手伝ってくれない？」

「荷物置いたらな。クリスマスのことならシオンに聞いたことがある」

なんだ、やつぱり知つてたんだ。でもこうやつて祝うのは初めてみたいだからパアっとやつてやろうじゃないか。

クリスマスパーティーが初めてのラグとまだ寝てるであろう高梨の反応がどんなに凄く楽しみで準備中ずっとクスクス笑っていた。

闇話 ルキアとクリスマス（ルキア s.i.d.e）（後書き）

ちなみに

「お兄ちゃん、美味しい！」

と言っていたのは弟です。そのつづきの話しあわ。

「ご感想などお待ちしています！」

閑話 彼岸花の年末（前書き）

結局、クリスマスまでに書き終わらなかつたので年末編と一緒にお届けします。

何もやることが無くて部屋で寝ていたら隣の部屋から鼻腔をくすぐる匂いがしてきた。何かお肉が焼けたような美味しそうな匂い。いてもたつてもいられなくて私はルキアがいるであらう隣の部屋へと向かつた。

「ん…、何の匂いかな？ 美味しそう…」

匂いに釣られて隣の部屋の扉を開けたら、その部屋の利用者一人と美味しそう料理が待っていた。

「「メリークリスマス！－リコリス」」

私を待っていたらしい一人が出迎えてくれた。あれ？ ラグ、クリスマスの事知つてたんだ。

「リコリス、早く食おうぜ！ 僕もう腹減つたあ

「何言つてんだよアホ紅蓮！ テメエに食わせる料理なんざ一つもねえよ！」

また始まつたよ。せつかくのクリスマスパーティーなのに……。溜め息をついて一人に拳骨を落とした。

「何時まで喧嘩してんのよ！ このまま一人ともお預けで良いの？」

「……………ごめんなさい。」

「さつ、早く食べましょ！」

じつして、クリスマスパーティーは始まつたけどなんだかんだで楽しかつた。ルキアとラグがすぐ喧嘩しなければもっと楽しかつたのにな。

「ああ、忘れる所だつた」

パーティーの終わり頃になつてラグが何かを思い出した。

「ちよつと待つてろよ」

ラグはカバンの中から一一つの包みを取り出した。その取り出した包みを私とルキアに差し出す。

「ほら、クリスマスプレゼント」

「……つ！……ありがとう……開けて良い？」

「ああ。いいぜ……つて、おいールキア！！何既に開けてんだよ！

！……」

「別にいいだる」

そう言いながらも貰つた万年筆を新しい玩具を貰つたみたいにはしゃいで見せびらかしてきた。

「とつとと高梨も開けたらどうだ？」

「分かってるよお……」

そつと紙を取り除いていき中に入つていた箱を開けた。

「可愛いー！」

中に入つていたのはシルバーのブレスレットでアクセントに花が

ついていた。

買ったてきた当の本人は微笑んでたけど頭をかいてる。ラグは案外照れ屋だからなあ。うん、気づかなかつた事にしよう。

じつして楽しい一日は終わった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

その六日後。

「高梨、小麦粉取つてくれ！おい紅蓮！そんなに細く切るな！」

私達はルキア指導の下うどんを作つていた。後になつて知つたんだけどクリスマス料理作つたのルキアだつたのよね。しかも全部。で、なんでうどんを作つているかといふと、本当は蕎麦が良かつたらしいんだけどテスラには無いから『年越し蕎麦』ならぬ『年越しうどん』を作つてるわけ。だつて大晦日だもんね。流石にラグは知らなかつたみたいで口があんぐりしてたよ！

「しつかし、リコリス達の世界つて本当イベント好きだよな」「そういえば、そうだよね」

ラグの言葉に思わずルキアと顔を合わせてしまつた。

言われるまで気づかなかつたんだもん。

うどん作りの作業に戻つた後、うどんをこねながらそつと呟いてた。

「来年も良い年でありますように……」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1362y/>

---

彼岸花の恋歌

2011年12月30日22時51分発行